

# 手本

天正五年七月廿六日

尊朝親王筆

高津利治氏藏

紙本墨書 縦三二・三 cm

全長六〇四 cm

〔図版十三〕

尊朝親王が天正五年（二五七七）二十六歳の時、習字の手本として、愛松丸と名付ゆられた童児に書与えた一巻である。

内容は別紙積文の通りで、最初に行体の伊路半四十七文字について数字が、七より万まで十三字、ついで和漢朗詠集より抄書したものの十一首、その後雲州消息に収められている代表的な書札例が二通続いている。その後「此一巻者愛松丸為<sup>テ</sup>手本<sup>ト</sup>染<sup>ム</sup>愚筆<sup>者</sup>也」〔天正五年七月廿六日〕「臨池未流（花押）親王」「春秋二十六」と為書がある。この款記によってこの一巻が、恐らく青蓮院門跡近く使えた雅児とおぼしき人物に、尊朝親王が、書の手本として与えたものとわかる。

現状は本文十一紙を継いだものであるが、第一紙の端に余白のないこと、他の書札往来などから考えて、もとは第一紙の草体のいろはの前に女手の仮名いろは一紙七行四十七字程があったものと推定される。また第二紙についてもその内容は和漢朗詠集巻下雑の一首であり、これは当然、同巻上の朗詠集の後に位置していたものと考えられる。

現存の内容、次第は後記積文の通りである。

尊朝親王（天文二一、八、二〇——慶長二、二、一三 一五五二—一五

九七）は、伏見宮邦輔親王の第六王子、天文廿一年（一五五二）八月二十日生れ、弘治元年（一五五五）青蓮院に入り、永禄元年、正親町天皇の猶子、永禄五年（一五六二）十二月薙髮、得度に当って曼殊院覚怒准三后が戒師となり、法またこれより受け、尊朝と号され。また入木道も覚怒から受けられた。

永禄六年十二月親王宣下、のち天王寺別当に補された。元龟四年（二五七三）には京師で將軍義昭と信長が交戦、大乱に及んだので、大和多武峯に退去、天正二年（二五七四）上洛、元龟二年（一五七二）九月、叡山焼亡以来廃絶の延暦寺を再興された。この一巻はその後四年目に作られたものである。天正十三年（一五八五）二月、百六十七代の天台座主となり、慶長十年病のため天台座主をやめられ、同二月十三日、四十七歳で歿した。諡号は龍池院という。

著書に墨池掌譜一冊、手習十三ヶ条記、唐崎松記などがある。なかでも「墨池掌譜」一冊（国会図書館蔵）は、青蓮院流の筆法を示したものである。また入木道口伝という書流の秘伝を編じた本を小松茂美博士が日本書流全史（講談社）に紹介されている。その他手本刊行物として六々（三十六歌仙）色紙形一冊、比叡山再興勸進帳天正十年（一五八二）十二月一帖が同誌に紹介されている。

尊朝親王の遺墨としては、詠草、短冊、手本、三大字、法語など十一点が、前述日本書流全史（三六五—三七五）に、消息往来が書の日本史（第五巻）（平凡社）に、御物青蓮院代々消息中の和歌懐紙（書道全集二〇号 平凡社） 龍虎二大字（同書道全集 二三号）などが紹介されている。が、為書、署名年紀の明らかなものは殆んど知られておらず、この手本一巻は、その意味で尊朝親王筆蹟研究の一資料となるのではないかと思われる。

日本書道中興の祖といわれる尊円親王の書風はそのまま青蓮院在住の歴代門主に引継がれ、各代の努力も相俟って、青蓮院流と呼ばれ、ますます盛んになり、室町時代中期には、関白一条兼良が尺素往来のなかで「近日は和字、漢字ともに尊円親王の御筆を以って規模とし、都鄙之を翫ぶ」と記すほどに人々の間に拡がっていった。

青蓮院流が別に、御家流と呼ばれる由縁は、藤原行成を始祖とする世尊寺の家の流の略称であるように、行成に淵源するこの流は、もともと宮廷の書役として奉仕するものであったから、この歴代の人は書法的にはそれぞれ立派な字を書いたが、個人的な書風でもって異形の文字をかいたりすることは許されなかった。尊円親王の入木抄に「邪僻をはなれてまさしき姿を専にすべき事」「異様をこのむべからざる事」とあるように、邪僻を離れて格式にのっとった書式を代々伝える必要がある、口授、秘訣によって家伝を伝授する形をとり、あえて新しい書風を工夫することは避けていた。つまり公用文にふさわしい手本乃至は教科書的な書き方を旨とする書流であった故に、青蓮院各代は尊円親王の祖風を忠実に受継いでいったのであるが、その結果、書風があまりにも似かよったため、後世、遺品から各代の筆蹟特徴を見つけることが大変むづかしくなったのである。とくに消息往来、書札往来などは、書の手本として作られたものであり、その内容に新味を求めるものではない。したがって自ら内容を創作したものでない限り、署名をされることはまずなかった。そのため尊円親王の祖風に従って青蓮院の各代がかいた手本類は、尊円親王の書にあまりにも似ているし、後世、そういった手本類についての性格上、尊円親王の筆とすることが好都合であり、署名のないのを幸ひ、殆んど尊円親王筆と鑑定されてきたものが多い

わけである。しかし、今日この青蓮院各代の数多くの手本類を、すべて尊円親王筆と伝えておいてよいわけではなく、その書風の中から、各代の微妙な筆蹟特徴を少しずつでも解明していかなければならない。

とくに近世初頭における近衛信尹、本阿弥光悦らの新しい書風の創始も、その基礎に、青蓮院流、わけても第四十七代、尊朝親王の影響が大きいと考えられるだけに、青蓮院流各代の標準となる資料の紹介が要望される。

前述の通り、青蓮院流は、極力その個性を押え祖風に忠実なため、その筆蹟特徴を把むことは仲々むづかしいが、それでも開祖、尊円親王の筆蹟と比較するといくつかの特徴はあげ得るように思われる。尊円親王の手本は、すべてやや右肩上りで、筆勢、筆圧がともに強く、書く文字に大小、太細が認められるが、尊朝親王のそれには、あまり極端な右肩上りの文字は認められないし、文字の大小、太い細いは、尊円親王ほどでなく、筆圧、筆勢も、おだやかではっきりと全体に丸味を帯びている。しかしこの差異は、微妙な程度のものである。

この手本は尊朝親王が血気盛りの二十六歳の筆蹟であるにかかわらず、全体に穏やかで、整っていて、すでに青蓮院流の形を見事に消化されており、この家流の特質をよく示しているように思われる。

(木下政雄)

(現文)

伊路半耳蕃邊登  
遲里怒留越我賀  
夜堂禮楚川祢那  
羅無有井乃於具  
屋滿氣布古衣傳  
阿散幾遊免見新  
衛飛裳勢須  
壹貳參肆伍陸漆  
捌玖拾佰仟萬

なにはつに

さくや

このはなふゆ

こもり

いまは

はるへと

さくやこ乃

はな

(和漢朗詠集卷下雜所収)

逐レ吹潜開不レ

待ニ芳菲之候一。

迎レ春乍レ變將レ

希ニ雨露之恩一。

(内宴進レ花賦。  
紀淑望)

池凍東頭風

度解。窓梅北

面雪封寒。

(立春日、書レ懐、呈  
芸閣諸文支。篤茂)

としのうちに春は

きにけり一とせを去

(同卷上春立春所収)

年とやいはむ今年とや

いはむ (元方)

柳無ニ氣力ニ條

先動。池有ニ波

文ニ永盡開。

今日不レ知誰

計會、春風春

水一時來。(府西池。白)

(同卷上春立春所収)

春たつといふ

はかりにや

みよしのゝ

山もかすみて

今朝は見

ゆらん(忠峯)

(同卷上春立春所収)

盧橘子低山

雨重。杵欄葉

戦水風涼(西湖晚賀孤山寺。白)

(同卷上夏花摘所収)

五月まつ

花たち

はなのかお

かけば

むかしの人

乃

袖のかそ

する

不堪紅葉青

苔地。又是涼

風暮雨天。(秋雨<sub>三</sub>中贈<sub>三</sub>元九。白)

—同卷上秋前裁所収—

志ら露もしくれ

もいたくもる山は

した葉

のこらす

色つきにけり<sub>三</sub>貫<sub>三</sub>之

—同卷上秋紅葉所収—

寒流帯<sub>レ</sub>月澄

如鏡夕吹和

霜利似刀(紅樓宴保。白)

(同卷上冬歲暮所収)

ゆくとしの

をしくも

あるかな

ますかか見

みるかけさへに

くれぬと

おもへは(貫<sub>三</sub>之)

(同卷上冬歲暮所収)

改年之後。富貴

万福幸甚々々。

柳陽春已報。

可<sub>レ</sub>樂者是時也。

詩酒之會遊覽

之興。聊欲<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>驥

尾<sub>一</sub>。殊有<sub>二</sub>允容<sub>一</sub>

所<sub>レ</sub>羨可<sub>レ</sub>是。每事

在<sub>二</sub>面拜<sub>一</sub>。謹言

(雲州消息卷上上啓案内事所収)

上聞

右来三日可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>

文會<sub>一</sub>之由云々。若

然者何處乎。東山

花水其得<sub>レ</sub>名之地

也。何可<sub>レ</sub>尋<sub>二</sub>他所<sub>一</sub>乎。下

官雖<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>七步之戈<sub>一</sub>。

聊學<sub>二</sub>六義之詞<sub>一</sub>。辱

春開<sub>二</sub>末座<sub>一</sub>。乞莫<sub>レ</sub>嫌<sub>二</sub>

瓦礫<sub>一</sub>。委細在<sub>二</sub>參

啓<sub>一</sub>。且捧<sub>二</sub>疎簡<sub>一</sub>耳。

頓首謹言。

(同消息所収ニハ三月一日右衛門権左藤原文  
章博士殿トアリ)

此一卷者愛松丸  
為<sub>二</sub>手本<sub>一</sub>染<sub>二</sub>愚筆<sub>一</sub>  
者也

天正五年七月廿六日

臨池末流（花押）親王

春秋二十六

